関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

# [卒業論文] バカロレアの論述試験で求められる学力



| | |
|---|---|
| 著者 | 河野 諒 |
| 雑誌名 | 仏語仏文学 |
| 巻 | 45 |
| ページ | 107-142 |
| 発行年 | 2019-03-14 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/16679 |

〔卒業論文〕

# バカロレアの論述試験で求められる学力

河　野　　諒

## 序　論

入試制度は、そのあり方をめぐって議論の的となることがある。たとえば日本では、大学入試センター試験（以下、「センター試験」と表記する）といった、マークシート方式による入試が問題視されている。その理由は、マークシートによる試験は、選択型というその形式上、受験生の評価される力が単純な知識に偏りがちなため、総合的な学力を測りにくいためであるとされている。こうしたことを考慮し、中央教育審議会[1)]が2014年に、センター試験の廃止を含む、大学入試制度の改革を文部科学省に答申するなど、その問題への対応も進み始めている。

そうした改革の際に、参考としてしばしば引き合いに出されるのが、欧米の入試制度であり、フランスの大学入試、バカロレアもその１つである。

バカロレアは主に、長時間かけて文章を作成する論述試験であるが、それが求める受験生の学力とは、論述型という試験形式に起因する、多岐にわたる能力である。

ただし、バカロレアが様々な学力を要求しているということは、単に問題が選択式であるか、記述式であるかという差異のみに基づいているのではない。バカロレアでは、解答内容が正しくても、文を単純に連ねるだけでは解答としては不十分であり、また、問題についても、具体的

1）日本の文部科学省に設置されている審議会。教育・学術・文化に関する重要事項を調査・審議し、また、これらの事項について文部科学省に建議する。

な問いが設定されていない場合がある。バカロレアにおいて必要とされる学力の領域を広めているのは、解答や問題に関するこうした部分であり、記述試験すべてが、バカロレアと同様に多様な学力を問うているというわけではないのである。

では、マークシートのような選択型の試験とは異なり、かつ記述試験の中でも特徴的な試験様式をもったバカロレアにおいて、受験生はどのような学力を求められているのか。

本稿では、このバカロレアが受験生に求める学力を、論述型という形式や、実際に出題された問題、一般的な解答方法などから考察し、明らかにすることを目的とする。まず、試験の分析に対する理解を円滑にするべく、第１章で、試験制度をその内容とする、バカロレアの概要を示す。次に第２章で、辞書や文献における情報をもとに、本論における「学力」の概念を簡潔に表しておく。そして第３章で、過去に出題されたバカロレアの問題などを一部取り上げ、それらを分析していくことで、バカロレアで必要とされている力を見ていく。

## 第１章　バカロレアの概要

１章では、試験問題の分析において前提となる、バカロレアの全体像を表すことにする。まず試験制度の基本事項を、続いて試験のコースや科目を、最後に問題の作成や答案の採点に関する仕組みを述べていく。

### 1.1　基本事項

バカロレアは、毎年６月下旬に６日間かけて行われる、フランスの統一国家試験、ならびに国家資格の１つである。後期中等教育の修了を証明する試験であると同時に、大学入学資格を証明する試験でもあり、これに合格すれば、文部大臣からバカロレア資格を与えられ、受験したバカロレアのコース・系（後述）に関係なく、原則としてどの大学・学部

にも入学することができる[2)]。試験形式は主に論述型であり、１科目の解答時間は２～４時間程度である。科目内容・科目数は、選択するバカロレアの種類によって異なる。論述型のほかに口述型の試験もあり、こちらの多くは、１科目10～40分といった、比較的短い時間で行われる。口述型の試験は、音楽や演劇といった芸術科目、ラテン語や古代ギリシャ語といった外国語科目など、多くは日本でいうところの副教科をその対象としており、バカロレアの本試験の前に、予備試験として実施される。各教科は20点満点で採点され、全教科の平均点が10点以上となれば、合格となる。点数が12点以上であれば、その点数に応じて、「秀（très bien）」（16点以上）、「優（bien）」（14点以上16点未満）、「良（assez bien）」（12点以上14点未満）の成績評価が与えられる。試験結果に同意できない場合は、不服の申し立てが可能であるが、通説では、それにより点数が大きく変わることはないとされている[3)]。なお、合格率は、2013年で86.8％であり[4)]、現在では18歳に達したフランス国民の、約２/３がバカロレアを取得しているとされる[5)]。

### 1.2　コース・科目

フランスのバカロレアには、次のページの表１で示しているように、普通バカロレア、技術バカロレア、職業バカロレアの３種類があり、後

---

2）ただし、入学希望者が各大学の収容定員数を超える場合、バカロレア試験の成績などに応じて、入学制限が設けられる。

3）「諸外国の教育評価　フランス　小学校から厳然とある『落第』 ── 個人が評価される確実な知識と論理 ── 」、https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/csken/pdf/52_06.pdf（2017年７月28日参照）より。

4）「各国の大学入学者選抜に係る共通試験について」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2014/06/09/1348274_8.pdf（2017年１月６日確認）より。

5）森田康夫「フランスの歴史・地理　教科書と国土教育 ── 『考え、表現すること』『空間で捉えること』を教えるフランスの教育 ── 」http://www.jice.or.jp/cms/kokudo/pdf/tech/reports/27/jice_rpt27_10.pdf（2017年７月31日参照）より。

**表１　バカロレアの種類と系等**

| 種類／創設年 | 系（専門領域） | 説明 |
|---|---|---|
| 普通バカロレア（baccalauréat général）/1808 | ・文学系（L: littéraire）<br>・科学系（S: scientifique）<br>・経済<br>・社会系（ES: économique et sociale） | 主に大学や専門高等教育機関など長期の高等教育機関を志望する生徒を対象としている。 |
| 技術バカロレア（baccalauréat technologique）/1968 | ・サービス産業系（STT: sciences et technologies tertiaires）<br>・工業系（STI: sciences et technologies industrielles）<br>・化学系（STL: sciences et technologies de laboratoire）<br>・医療系（SMS: sciences et techniques médico-sociales）<br>・農産系（STPA: sciences et technologies du produitagroalimentaire）<br>・農環境系（STAE: sciences et technologies de l'agronomie et de l'environnement）<br>・舞台芸術系（TMD: techniques de la musique et de la danse）<br>・ホテル業系（Hôtellerie） | 主として職業人養成を目的としているが、高等教育（主として短期高等教育）への進学をも目的に含んでいる。このため試験は、職業試験と普通試験の二つの領域から構成される。 |
| 職業バカロレア（baccalauréat professionnel）/1985 | 各種事務、製造業、サービス産業、建設業などの諸職業分野について、様々な職業資格につながる専門領域（spécialité）がある。 | 一種の職業資格と考えられているが、他のバカロレア同様高等教育進学資格が与えられる。 |

出典：http://home.hiroshima-u.ac.jp/oba/docs/baccaluareat20050521.pdf の表1を筆者修正

期中等教育で履修した教育コースに応じて、受験するバカロレアが決定される。普通バカロレアは、主に大学や専門高等教育機関など、長期高等教育機関の志望者を対象としており、文学系、経済・社会系、科学系の３つにわかれている。大学入学者の約４分の３は、普通バカロレアの合格者であり[6)]、その点で、３種類のバカロレアの中では主要な位置を占めている。技術バカロレアは、主に大学付属の技術短期大学部（IUT：

6）細尾（2010：387）より。

Instituts universitaires de technologie）や、高級技術者養成短期高等教育課程（STS：Section de technicien supérieur）といった、短期高等教育機関の志望者を対象としている。技術バカロレア取得者の５割強[7]は、職業資格[8]の取得を目的とするこうした教育機関に進学するといわれている。職業バカロレアも、同じく１種の職業資格であり、職業バカロレア取得者の８割弱は、進学せずに直接就職しているとされる[9]。

次に試験科目についてであるが、本稿では一例として、2016年度の普通バカロレア・人文科学系のものを、表２で表した。普通バカロレアの３コース、および技術バカロレアの８コースでは、予備試験と本試験を合わせ、10科目程度の必修科目と、最大２科目までの自由選択科目を受験する。職業バカロレアの場合は、７科目の必修科目と、１科目の自由選択科目が課せられる。前述の通り、受験する科目はコース・系により異なる。普通バカロレアの場合、指導付個別課題学習、歴史・地理、現代外国語１、現代外国語２、哲学、体育・スポーツは、試験内容は異なるものがあるにせよ、全ての系において必修である。このうち指導付個別課題学習と体育・スポーツは、予備試験科目であるが、出身高校の平常点で成績がつけられる。自由選択科目は、10点以上の場合のみ、バカロレアの成績の一部として加味され、第一選択科目の成績は、２倍の評価で考慮される。また、各科目には係数が設けられており、その数字は評価配分に比例する。普通バカロレアの係数は、文学系では哲学が、経済・社会系では経済・社会科学が、科学系では数学が最も高い。

---

7）細尾（2010：388）より。

8）たとえば、IUT での２年課程修了後、所定の単位を取得することによって授与される DUT（Diplôme universitaire de technologie）、STS での２年課程修了後、試験を受けて取得する BTS（Brevet de technicien supérieur）などがある。

9）細尾（2010：388）より。

**表２　2016年度　普通バカロレア・人文科学系の試験科目など[10)]**

予備試験

| 科目 | 係数 | 試験形式 | 時間 |
|---|---|---|---|
| フランス語・文学 | 3 | 筆記 | ４時間 |
| フランス語・文学 | 2 | 口述 | 20分 |
| 科学 | 2 | 筆記 | １時間30分 |
| 指導付個別課題学習 | 2 | 口述 | ３人1組のグループで30分 |

本試験

| | 科目 | 係数 | 試験形式 | 時間 |
|---|---|---|---|---|
| 必修科目 | 文学 | 4 | 筆記 | ２時間 |
| | 歴史・地理 | 4 | 筆記 | ４時間 |
| | 現代外国語１ | ４または４＋４[11)] | 筆記・口述 | ３時間＋20分 |
| | 現代外国語２ | ４または４＋４ | 筆記・口述 | ３時間＋20分 |
| | 外国語による外国文学 | 1 | 口述 | 10分 |
| | 哲学 | 7 | 筆記 | ４時間 |
| | 体育・スポーツ | 2 | 定期試験 | |
| 専門科目（一科目選択） | 古代ラテン語・文化 | 4 | 筆記 | ３時間 |
| | 古代ギリシャ語・文化 | 4 | 筆記 | ３時間 |
| | 現用語１または２（上級） | 4 | 筆記・口述 | （脚注11を参照） |
| | 現用語3 | 4 | 口述 | 20分 |
| | 数学 | 4 | 筆記 | ３時間 |
| | 法と現代世界の争点 | 4 | 口述 | 20分 |
| | 造形芸術 | ３＋３ | 筆記・実技 | ３時間30分＋30分 |
| | シネマ・オーディオビジュアル | ３＋３ | 筆記・口述 | ３時間30分＋30分 |
| | 美術史 | ３＋３ | 筆記・口述 | ３時間30分＋30分 |
| | 音楽 | ３＋３ | 筆記・口述 | ３時間30分＋30分 |
| | 演劇 | ３＋３ | 筆記・口述 | ３時間30分＋30分 |
| | ダンス | ３＋３ | 筆記・口述 | ３時間30分＋30分 |
| | サーカス芸術 | ３＋３ | 筆記・口述 | ３時間30分＋30分 |
| | 体育・スポーツ（補足） | 2 | 定期試験 | |

10）éduSCOL の HP（http://eduscol.education.fr/cid58534/serie-l.html、2017年１月６日確認）をもとに筆者が作成。

11）専門科目で「現用語１または２（上級）」を選択した場合、必修科目のものと統合して試験が行われ、「４＋４」の係数が適用される。現用語２についても同様。

| | 科目 | 試験形式 | 時間 |
|---|---|---|---|
| 自由選択科目（最大二科目選択可） | 現用語３（外国語または地域語） | 口述または筆記（言語による） | 20分または２時間 |
| | フランス語手話 | 口述 | 20分 |
| | 古代ラテン語・文化 | 口述 | 15分 |
| | 古代ギリシャ語・文化 | 口述 | 15分 |
| | 体育・スポーツ | 定期試験 | |
| | 芸術（造形芸術、シネマ・オーディオビジュアル、美術史、演劇から選択） | 口述 | 30分 |
| | 音楽 | 口述 | 40分 |

出典：http://eduscol.education.fr/cid58534/serie-l.html

### 1.3　問題の作成と答案の採点

バカロレア試験は、問題の作成や答案の採点に携わる試験委員会によって運営され、問題作成委員会（commission d'élaboration des sujets）、合意委員会（commission d'entente）、調整委員会（commission d'harmonisation）、合否判定委員会（délibération des jurys）の４つがある。これらの試験委員会によって行われる、問題作成から合否判定までの流れを表したのが以下の図である。

図１のとおり、まず試験の９カ月前に、バカロレアの試験問題の作成が始まる。問題作成は教科ごとに大学区[12]間で割り当てられ[13]、各大学区に問題作成委員会が設置される。委員会は視学官１名と大学教員１名を共同委員長として、区内の複数の高校教員で構成され、共同委員長が監督する学習指導要領に沿って討議を行い、問題を作成する[14]。また、同時

12）フランスの海外県・海外領土を除く本土を、26に分けた区域。

13）割り当ての例としては、A 大学区は歴史・地理、B 大学区は英語、C 大学区はフランス語など。

14）バカロレア創設当時は、バカロレアの授与機構は大学であるという理由から、問題の作成と採点を行っていたのは大学教員であった。しかし大学教員の作成する問題が、高校の教育内容の範囲を超えていたことや、それによって暗記偏重の受

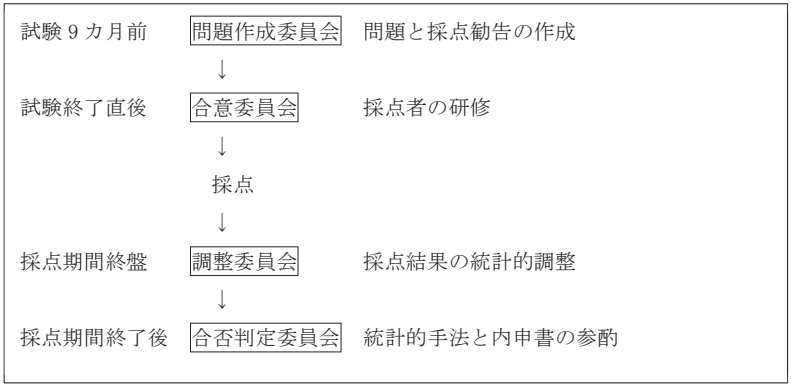


**図１　問題作成委員会と採点組織の概要**

出典：http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/108466/1/eda056_387.pdf

に採点の方針を示す「採点に関する勧告」（以下、採点勧告）も策定され、各大学区で作成された問題と採点勧告は、収集された後、フランスで全国共通的に使用される。

バカロレアの本試験が終了すると合意委員会が設置され、採点者の一部が、採点勧告に基づいた共同採点などの研修を受ける。ここでの決定事項は採点者全員に伝えられる。

その後、採点者となる高校教員は、自分の勤務校から離れた試験センターに配属され、約２週間にわたって答案を採点する[15)]。採点期間終盤になると、採点者全員によって調整委員会が開かれ、ここで採点結果が委員間で統計的に調整される。

採点期間が終わると、合否判定委員会が開かれ、採点者間で採点結果の比較が行われる。この時、ばらつきが大きい場合は、低いほうの点数

---

験準備教育が行われるようになったこと、また、ベビーブームの影響で受験者が急増したことによる、人手不足などを受けて、作問や採点の主体が次第に高校教員へと移った。

15）教科により異なるが、教師１人あたりが採点する答案の量は、平均50～100枚とされる。

を上げることが認められている。また、高校の内申書（le 1 ivretscolaire）を加味して点数が上げられることもあるほか、採点の厳しい教師や甘い教師がいた場合、試験委員長（le président du jury）の権限によって、点数の調整が施されることもある。

このようにして採点が記録され、その最終結果をもとに、受験生は、配点係数を加味した全教科の合計の平均得点が10点以上の合格者と、8点以上10点未満の「第二群」試験受験者[16]と、8点未満の不合格者に分かれる。

## 第2章　学力とは何か

前章では、バカロレアの概要を表し、試験の全体的な制度について述べた。本論の研究目的は序論で示した通り、このバカロレアが、受験生にどのような学力を求めているのかを明らかにすることである。しかしその考察に入る前に、第2章でまず、本論の研究内容においてキーワードとなる、学力の定義を確認しておく。なぜなら、学力の意味や内容は、国の教育文化などによって、多少なりとも解釈に相違が生じうるからである。言い換えれば、フランスにおける学力の定義と、他国における学力の定義が、全面にわたって一致するとは限らないと考えられるであろう。したがって、学力というものを普遍的なイメージや概念のみに基づかせた場合、バカロレアが問う学力を明らかにするという本論の分析において、学力そのものに対する認識に、不明瞭さや曖昧さをもたらしかねない。そこで本章では、辞書や文献に記されている情報をもとに、本論における「学力」の定義付けを行うことにする。まず辞書による定義を確認し、次に文献に掲載されている定義を表す。そして、適宜他の情報も加えながら、これらの定義を考慮し、バカロレアを前提とした「学力」の意味を示す。

---

16）8点以上10点未満の場合は、成績評価は与えられず、2週間後に口述型の追試験を受けることになる。

## 2.1　辞書による定義

学力の定義を確認するにあたって、本論では日本の国語辞典とフランスの国語辞典（仏仏辞典）を２冊ずつ、和仏辞典を１冊、参考として用いることにした。

### 2.1.1　日本の国語辞典

広辞苑[17] によると、学力は「①学問の力量。がくりき。②〔教〕学習によって得られた能力。学業成績として表される能力。」と定義されている。また、同じく日本の国語辞典である大辞泉[18] によると、学力とは「学習して得た知識と能力。特に、学校教育を通して身に付けた能力」とされている。ここで注目すべき、双方の定義に共通する主要な意味内容は、「学習で得た能力」という部分である。つまり、学力は先天的な能力ではなく後天的な能力のことを指しているのであり、能力による結果の差はどうあれ、いわゆる才能といった生まれつきの素質や能力を直接的に意味しているのではない。また、広辞苑の「学業成績として表される能力」という箇所や、大辞泉の「特に、学校教育を通して身に付けた能力」という部分から、学力は、個人的な学習によって得られた能力というよりも、学校という社会的な場での学習、すなわち、教育によって培われた能力であるという意味合いに力点が置かれているといえる。

### 2.1.2　和仏辞典・仏仏辞典

フランスの国語辞典による学力の定義を見るにあたって、まず日本語の「学力」という語が、フランス語のどの単語に相当するのかを確認する必要がある。そこで、プチ・ロワイヤル和仏辞典[19] で「学力」という語を調べたところ、そこでは « connaissance » が同義の単語とされていた。

---

17）新村出編（2008）『広辞苑』第六版、岩波書店。

18）小学館『大辞泉』編集部（1995）『大辞泉』松村明監修、小学館。

19）恒川邦夫・牛場暁夫・吉田城編（2010）『プチ・ロワイヤル和仏辞典』第３版、旺文社。

よってここでは日本語の「学力」に当たる言葉を « connaissance » とし、この « connaissance » という語を Le nouveau petit Robert[20] で引いたところ、「ce qui estconnu ; ce que l'on sait, pour l'avoir appris（既知のこと。学習したために知っていること。）」と記されていた。また、別の仏仏辞典、Larousse junior[21] では、« connaissance » は「Ce que l'on sait, ce que l'on a appris（知っていること、学んだこと。）」と定義されている。これらのことから、日本における定義と同じく、フランスにおける「学力（connaissance）」も、生得的な力ではなく、学習によって得たもののことを指しているといえる。また、Le nouveau petit Robert では « connaissance » の類義語の１つとして « acquis » が挙げられていた。この « acquis » という単語を同じ辞典で調べたところ、「savoir acquis, expérience acquise constituant une espèce de capital（後天的に得た知識・学識、獲得して蓄えになるような経験）」と定義されており、« connaissance » と同様に、やはり後天性を強調していることがわかる。ただし、日本の国語辞典とは違い、フランスの国語辞典では、学力について、学校教育に関する言及や示唆は見られない。これは、フランスでは予備校や塾などが日本ほど発達しておらず、学校が教育の場の主体とされているためであろう。学習の大部分が学校教育によって成り立っており、それが自明とされているため、学校教育に関する情報を明示する必要がないのであると考えられる。

### 2.2　文献における定義

戸瀬信之・西村和雄編『教育における評価とモラル』内で市川昭午は、学力について以下のように述べている。

---

20）Josette Rey-Debove et Alain Rey（sous la direction de）, *Le nouveau petit Robert : dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, Paris, Dictionnaires Le Robert, 2000.

21）*Larousse junior*, Paris, Larousse, 2003.

> 学力の概念規定は人によって様々であるが、学習によって身につけた知的能力をいい、一般的には主に学校で育てられる知的能力をさす。学校教育によって育てられる能力といえば知育、体育、徳育の３分野にわたるはずであるが、学力はもっぱら知育に関して用いられる。（戸瀬・西村 2011：３）

このように、市村の表す定義においても、「学習によって身につけた」という内容が含まれている。また、大辞泉の定義と同じく、学力は学校教育によって養われた能力であるとも述べられている。しかしこの定義において注目すべき点は、「学力」の意味に体育や徳育で育まれる能力が含まれていないというところである。体育によって育てられる能力に関して、市川は、それが学力に含まれない理由として、今日では身体的能力は選抜の手段とされないからであるとしている。つまりこの定義と理由によると、学力は、特に入学試験で扱われる科目の習熟度を表しているのだといえる。なお、徳育が含まれない理由に関しては、ここでは言及されていない。

このほか、市川は学力について以下のようにも述べている。

> 知的能力としての「学力」といえども学校だけで育てられるものではない。「学んだ結果としての学力」は予備校や学習塾あるいは家庭教師などに負うこともあるし、まして「学ぶ力としての学力」は家庭や地域社会、先天的能力によるところが大きい。（同上：３−４）

つまり、学力は学校教育のみならず、実際には学校外での学習によって得た力もその意味に含めるのであるとされており、広辞苑や大辞泉による定義よりも、掘り下げた広い範囲で学力というものを見ていることがわかる。また、市川によれば、学力を「学習する力」とした場合、それに含まれる学習意欲、知的好奇心、集中力、持続力、意思疎通力などは測定が困難なだけでなく、多分に生得能力的なところもあるゆえに、

そうした学力は、学校で育てられた力であるとは言い難いという。ここで問題となるのは、学力を「学習した結果」とするのか、「学習する力」とするかによって、能力の内容が大きく変わってしまうことである。後者の場合、主に先天的な能力を学力の意味に含めるため、2.1節で挙げた辞書の定義とは根本的にかけ離れる。また、客観的な測定が難しいことから、その評価の基準は曖昧なものになると考えられよう。この、「学力」をどちらの見方で定義するかという問題については、後の2.3節で扱うことにする。

このほか、本稿ではフランスにおける学力観について述べられた文献も参照した。教育方法学者の細尾萌子は、その著書[22]において学力を« acquis »とし、フランスの辞典[23]や報告書[24]の定義から、« acquis »の意味を「学習活動によって生徒が後天的に獲得した知識や技能」と解釈している。加えて細尾は、教育学における一般的な「学力」の定義[25]を踏まえて、「能力のうち学校教育によって意図的に育成された部分という点で、フランス語のacquisと日本語の学力は重なる」と考えている。2.1.2項で示した定義では、学校教育については触れられていなかったが、細尾の解釈した定義によれば、フランスにおいても、学力が学校教育によって培われる後天的なものであり、その意味において日本語の「学力」と一致するとしていることがわかる。

---

22）細尾萌子（2017）『フランスでは学力をどう評価してきたか教養とコンピテンシーのあいだ』、ミネルヴァ書房。

23）Guilbert L., Lagane R. et Niobey G.（dir.）, *Grand Larousse de la langue française*, Paris, Larousse, 1971-1978, 7 vol. および Imbs P.（dir.）, *Trésor de la langue française : dictionnaire de la langue du XIXe et du XXe siècle（1789-1960）*, Paris, Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique, 1971-1994, 16 vol.

24）Inspection Générale de l'Éducation Nationale, *Les livrets de compétences : nouveaux outils pour l'évaluation des acquis*, Rapport no. 2007-048, juin 2007, p.5.

25）意図的・計画的・系統的な教授＝学習活動を通して後天的に獲得される人間的能力。木下繁彌「学力」安彦忠彦ほか編『新版　現代学校教育大事典』ぎょうせい、2002年、pp.374-375より。

### 2.3　学力の定義付け

辞書と文献における定義を確認したところで、本稿における「学力」の定義を定める。

まず明確にしておくべき点は、2.2節で言及したように、学力を「学習した結果」とするか、「学習する力」とするかである。学力を「学習する力」とした場合、先述の通り、その評価の難しさが問題となる。学習意欲や集中力などは、結果的に試験の成績に影響することはあっても、それら自体を入試において数量化・数値化し、客観的に判断・評価することは極めて困難であり、実行されたところで入試における採点に支障をきたす可能性が高いと考えられる。よって入試が、生得的な部分を含意するそうした力を直接的に問うているとは言い難い。また、バカロレアに関していえば、その試験で問われる学力は、リセの教育目標として目指されている学力と重なり、その評価も、教育の成果として身に付いた学力を確認・認証するという統括的目的（visée sommative）で行われてきたとされている[26]。つまり、バカロレアにおいても評価されるのは、教育による学習の結果であるということがわかる。こうした評価の妥当性や、後天的な意味合いの強さ、フランスの教育文化的な背景を踏まえて、本稿では学力を、「学習する力」ではなく、学校教育の中で「学習した結果」として見ることにする。

次に問題として考えられるのが、学力を「学校教育によって身に付いた力」だとした場合に、知育以外によって育まれる能力も、学力の内容に含めるのかという点である。フランスの教育は、情意面の形成を含む徳育（éducation）、客観的な知識・技能の伝授である知育（instruction）、職業資格の所有者を育成する養成教育（formation）の３つに区分され、徳育は親や教会や地域社会の仕事、知育は普通教育学校の任務、養成教育は職業学校や企業の担当という役割区分が確立されている。このうち、第三共和政以降の中等教育において目的とされてきたのは、知育とそれ

26）細尾（2017：22-23）より。

を通した理性の啓培、すなわち一般教養（culture générale）の錬成であり、教育においては知性主義[27]が伝統とされてきた。このように、フランスでは知育を学校教育の目的や任務としていることから、本稿における「学力」は、学校教育によって培われる能力のうち、知育によって育まれる力を意味するものとしておく。

以上のことをまとめ、バカロレアを前提とした本稿では、学力を「学校の知育によって身に付いた能力」と定義することにする。

## 第３章　バカロレアで問われる学力

第１章で述べたように、バカロレアには論述型の試験と口述型の試験があるが、このうち評価の比率を大きく占めるのは前者である。第２章で学力の定義を確認したところで、本章では、その主たる論述試験が、受験生のどのような力を問うているのかを考察・分析していく。その参照として本稿では、普通バカロレアにおいて必修科目とされるもののうち、歴史[28]、フランス語、哲学の試験問題を一部取り上げることにした。

### 3.1　歴史の試験

歴史の問題形式は、与えられた２つのテーマの中から受験生が１つを選択して解答するというものである[29]。以下に、2017年に文学系および経済・社会系で出題されたテーマの１つを挙げる。

---

27）知育主義とも呼ばれ、デカルト以来の合理主義的自由思想を基盤に、客観的知識・技術の伝達を通した「理性の研磨」を学校教育の一般的な任務とするもの。田中（2005：216-217）より。

28）バカロレアでは歴史と地理を合わせて１つの科目（Histoire-Géographie）となっている。しかし地理の問題の解答は、クロッキー（croquis）と呼ばれる、地図を用いた方法によるものであるため、論述形式の問題を取り扱う本論では、地理の問題は省くことにした。

29）資料を使った問題が出題されることもある。

La Chine et le monde depuis 1949（1949年以降の中国と世界）

このようにバカロレアの歴史の試験では、テーマが疑問形や命令形ではなく、体言止めで表される。「～をしたのは誰か」「～は何年に起きたか」といったような、単純な知識を問うものではなく、「～について述べよ」「以下の語句を用いて」といった、具体的な指示や条件もない。こうした問題では、受験生は自ら問いを設定しなければならないのである。その際一般的に受験生が取り組むべきことは、与えられたテーマを分析することであるが、ここでは語の定義が重要な分析のポイントとなっている。なぜならテーマで用いられている言葉をどう解釈するかが、解答の軸を左右するからである。この用語の分析と定義に関して、フランスにおける試験問題などを取り扱う学習サイト、digiSchool では、「この行程を怠ってはならない。試験の合格を左右し、問題提起を可能にするものであるからだ。全ての語、最も重要ではないと感じるものでも、定義するのを忘れてはならない［引用者訳］」と述べられている[30)]。では、用語の定義とはどのようなものであるのか。以下に、同サイトに挙げられている、この問題における定義の着眼点を表す。

・«La Chine»：中国は、共産主義者による、強力な政治の歴史によってその名を示してきた、アジア大陸の国である。「中国」と「中華人民共和国」は切り離せない。
・«Et»：２つの要素が結ばれること、相互関係。
・«Le monde»：国際社会、中国の隣国だけでなく、世界全国。ゆえに、中国が結んでいる他国との経済的・政治的・外交的関係を考慮するようにせよ。

30）“Correction Histoire Géographie-Bac ES 2017” digiSchool https://www.bac-es.net/document/histoire-geo/correction-histoire-geographie-bac-es-2017-4839.html（2017年８月16日参照）より。

・«Depuis 1949»：

◦1949年10月１日：中国国民党の国家主義者に対する、何年にもわたる内戦後に発された、毛沢東による北京での中華人民共和国の建国宣言。

◦毛沢東派の共産主義者による中国が始まる。中国は冷戦下で、権力を拡大しようと試みる。

◦1980年代から今日までの発展。今日では、中国は世界で２番目の経済大国となっており、国際舞台における第１候補になろうとしている。［引用者訳］

上記の定義では、与えられたテーマを単語ごとに区別し、それぞれの語から考えられる、解答として論じるべき内容や、注意すべき点が表されている。つまり、ここでの用語の定義とは、与えらたテーマの中から、解答として有効に使えそうな材料を考え出すことである。いわばここで、潜在している課題を考え、発見する力が問われているといえよう。このテーマの分析において前提となるのが知識であるが、ここで必要とされているのは、単なる人物名や出来事、年号に留まらない。論述型で主になされるべきことは、「～はこのようにして起こった」「～は～にこのような影響を与えた」といった、出来事の流れや状況の説明であり、そのためには、背景や因果関係なども記憶しておくことが不可欠である。こうしたことは、マークシート式の試験で見られるような、「出来事（A）～（D）を並び替えよ」といった問題を解く場合においても、ある程度必要とされる。しかしマークシート式では、知識が曖昧でも大体の流れを掴んでいれば、推測で正解を選ぶことができたり、全くわからない問題であったとしても、偶然の的中で正解を得られる可能性がある。対して論述型では、出来事の前後関係も含めて、答えを全て自分で書き出さなければならないため、偶発的に点数を得ることは困難であり、また、その意味において、より正確な知識が求められているといえる。

テーマの分析を終えると、次は問題提起に移る。自分がこれから論じ

ること、つまり、論の全体像を示す場であるが、ここでは、与えられたテーマを単に繰り返すのではなく、自分で設定した問いを自分の言葉で表さなければならない。digiSchoolでは、この問題に関しては、1949年以降中国が果たした、世界的役割の発展や変化の観念について触れたものでなければならないと述べられており、例として「外界に対し、比較的閉鎖的であった人民共和国の中国は、どのようにして今日のような世界的大国となったか［引用者訳］」「中国はどのようにして国際舞台における主役となったか［引用者訳］」といったテーマが挙げられている。

問題提起の次は、解答の構想を示さなければならない。たとえばこの問題の場合、1949年から現在までの、中国の国際関係の発展をよく示すべく、年代順で文章を組み立てることが提案されている（例：1949年から1970年代、1970年代から2000年代、2000年代から2010年代の三部構成）。このようなプランの表明が必要とされるのは、与えられたテーマに対して自分がどのように取り組むのかという解答の方法や手順、過程まで採点の対象になるからである。したがって、たとえ解答内容が正しくても、単に文章を連ねるだけでは、高い評価は得られない。高得点を得るには、内容が正確であるだけでなく、解答の構造（序論・本論・結論）や論の進め方が、論理的でなければならないのである。つまり、筋道を踏まえて解答内容を構成し、説明する力が問われているといえよう。その際、わかりやすさを意識し、「まず」「次に」「最後に」といった、論の展開を表す語を用いて、論の構造を明快にしておくことが望ましいとされる。

こうして序論で問題提起と解答の構想を示した後に、本論に移る。本論は、テーマの分析から得た、論じるべき点を詳細に掘り下げ、それを序論で述べた手順通りに説明する場である。たとえばdigiSchoolの模範解答では、以下のように本論が構成されている。

Ⅰ．1949-1976：毛沢東主義の中国、国際関係に対して閉鎖的であった国家

A. 中国とソ連：中華人民共和国の建国を契機とする、特権的関係
B. しかしながらソ連との関係断絶後、中国は世界的な共産主義のモデルとして現れる
C. 中国を国際的な政治大国にさせる、西洋諸国からの緩慢な承認

Ⅱ. 1976-2000s：経済発展による、漸進的な開放
A. 鄧小平の経済改革
B. 世界的な経済大国、中国：市場社会主義
C. 国際社会において議論と論争の的となる中国

Ⅲ. 2000s-2010s：「中国の夢」、すなわち「完全な」力の練り上げ
A. 中国のソフト・パワーの拡大
B. 中国のハード・パワーの拡大、すなわち習近平の「夢」

［引用者訳］

ここでは、国際関係に着目しつつ中国がどのように発展していったのかを段階的に述べようとしていることがわかる。このように、本論の中でも解答内容を数段階に分けるなど、論の構造や読みやすさ意識して文章を作成することが理想とされている。

本論を書き終えると、最後は結論で締める。自分が述べたことをそのまま繰り返すのはナンセンスとされるため、ここでもそれを要約し、できるだけ別の言葉で言い換えて表現する力が必要である。なお、模範解答では「中国は1949年以降、閉鎖的な共産主義国家から世界第２位の経済大国へと、国際的に大きく進展した。［引用者訳］」と結論付けられている。

以上が、一般的な解き方である。これは一例にすぎないが、どのようなことを論じるにしても、解答は論文としての体裁をなしていなければならない。そのためには、先に述べたように、解答内容を構成する力、要約する力、表現する力などが不可欠である。こうした力は、答えを結論のみで表す選択型の問題や、字数制限を設ける短文の記述問題では測りがたいため、バカロレアの論述試験において求められる、学力の特色

ともいえる。

最後に、フランスの歴史学者や地理学者達によるサイト、Les Clionautes に掲載されている、バカロレアにおける歴史の試験評価一覧表（grille d'évaluation）を図２として次頁に表し、一般的な採点のポイントを確認することにする[31)]。図２の評価一覧表では、学力の領域が RÉDIGER（書く）、CAPTIVER（魅せる）、SOIGNER（気を配る）の３つに区分され、それぞれに評価の項目が６つある。まず、「書く」の領域は論理構造（Plan logique）、パラグラフのバランス（Équilibre des parties）、適切な論拠（Arguments adéquats）、述べられた基礎知識（Notions explicitées）、例の選択（Choix des exemples）、事実の正確さ（Précision des faits）といった、文章を作成する上での、基礎的な学力に関する項目で構成されている。すなわち、論を構築する力、根拠の合理性、知識の量や正確さ、例の妥当性が問われていることがわかる。次に、「魅せる」の領域では持ち出されたテーマ（Sujet amené）、問題提起（Problématique）、構想の発表（Annonce du plan）、最後の総括（Synthèse finale）、問題提起に対する解答（Réponse à la problématique）、テーマの再開（Relance du sujet）といった、解答の全体像に関わる項目が挙げられている。つまり、ここで求められているのは、与えられたテーマに対する分析力、自分が設定した課題とそれに対する答えの的確さ、また、それらを説明する力などであろう。そして、「気を配る」の領域は、文（Phrases）、スペル（Orthographe）、レイアウト（Mise en page）、質（Qualité）、読みやすさ（Lisibilité）、パラグラフの区切り（Découpage Paragraphes）といった、論の細部にわたる体裁が評価の項目となっている。いわば、読み手となる採点者の立場を考慮し、解答内容を明快に伝達するための、細心の注意力や表現力が必要とされているのである。このように、試験において主にどのような点が評価の対象になっているのかを見ても、バカロレアでは様々な力が問われているということがわかる。

---

31）公式の採点基準は、公表されていない。

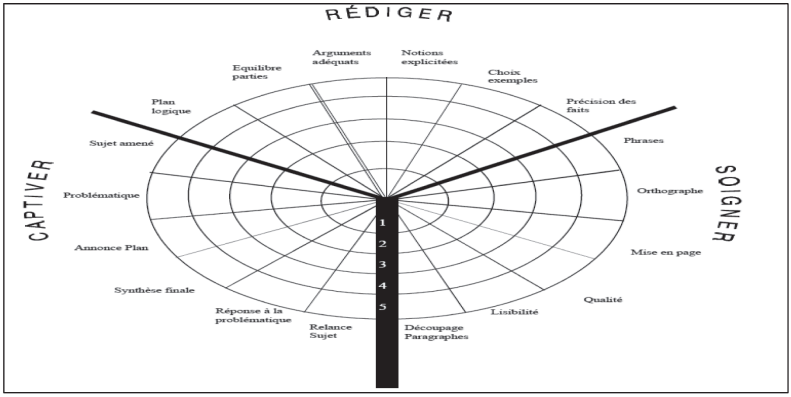


**図２　評価一覧表（歴史）**

出典：https://www.clionautes.org/archives-clio/profs/sentier/evalycee.pdf

### 3.2　フランス語の試験

バカレロアのフランス語の試験は、与えられた複数の文学テクストを読み、それらについて論じるというものである。受験生はまず、テクストの内容に関する１つの質問に答え、次に、「評釈」「論文」「創作」の３つから、１つのテーマを選んで解答する。本論では、これらのうち「評釈」の問題を扱うこととする。

フランス語のテクスト評釈（le commentaire de texte）とは、問題用紙に記載されている文章を読み取り、そこに書かれている内容について説明するというものである。この評釈、« commentaire » は、テクストを客観的に解釈・批評することを指し、自分の意見を述べたり、既出の内容について補足を加えたりすることではない。読み取ったものを、受験生自身で解説することが要求されているのである。

では、実際にどのような評釈テーマが出題されるのか。ここではその例として、経済・社会系と科学系で出題された、2015年度のテキストを１つ、以下に取り上げる。なお、実際の問題用紙には行と注釈が記載されているが、本稿では便宜上省略した。

テクスト C：ロラン・ゴデ（Laurent Gaudé）、1972年生まれ

『ユーフラテスの青い虎（Le Tigre bleu de l'Euphrate)』
第10場（2002）

この抜粋は10場からなる戯曲の最後の部分である。聞こえるのはただひとつ、アレクサンドル大王の声だ。第１場で、死に臨んで王は、周りに馳せ参ずる者をすべて追い出す。そして自分の前に死が立っていると想像し、その死に向かって、ある日、青い虎が彼の前に現れたこと、自分の人生の目的は、中東を貫いて常に遠ざかってゆくその虎を追うことだったと語る。しかし、兵士たちの懇願を聞き入れて、彼は青い虎を追うのをやめ、引き返す。

[…]
私はひとりで死ぬだろう。私を焼き尽くすこの焔のなかで、剣もなく、馬もなく、友もなく、闘いもなく、そして私はおまえに哀れみを乞う、私は決して満たされることのない者、征服の思い出のほかにはなにも持たない人間。私は決して留まることなく陸地のすべてを駆け巡った人間。ユーフラテスの青い虎を最後まで追うことができなかった人間。私はとり逃した。私はあれが遠くに消えて行くままにして以来、断末魔の苦しみだ。今、死のうというとき、私は泣く　見る時間のなかったすべての土地のために。 私は泣く　欲望の遠いガンジス河のために。もう何も残っていない。バビロンの宝もむなしく、これらすべての勝利もむなしく、私は母から出て来たままの裸の姿でおまえの前にいる。私のために泣いておくれ、渇ける男のために。私はもう走らない、もう闘わない、私はもうすぐあの影の一人　光のないおまえの地下で交じりあい交差し合う数百万の影の一人になる。けれど私の魂、まだ長いこと、馬の息吹に揺すぶられるだろう。私のために泣いておくれ、私は死んで行く男　この渇きとともに消えていく

テクストは以上である。ではこうした問題において、受験生はどのよ

うな力を求められているのか。3.1節と同じく、一般的な解答方法や模範解答などから、それを明らかにする。なお、模範解答については、フランス文学情報サイト、« Etudes Littéraires »に掲載されていた解答例を、エッセイスト・翻訳家の中島さおりが、一部改稿して訳したものを本稿では使用した。

論述の流れとして、受験生はまず、テクストの紹介をする。たとえば模範解答では、以下のように述べられている。

> 評釈すべきテクストは、2002年に発表された、ロラン・ゴデの『ユーフラテスの青い虎』の第10場の抜粋である。作品の最後に位置し、アレクサンドル大王の最期の苦しみの場面である。
>
> これは戯曲で、悲愴で悲劇的な調子のモノローグである。このテクストは、27歳で当時知られた世界の大部分を支配下に置き、33歳で亡くなった征服者の最期の時を書き、我々人間の死に対する問いについて考えさせる。（中島 2016：234）

このように、自分がこれから論じる対象物をジャンル、時代、文学史的な位置づけをふまえて確認し、テクストのタイプ、形式、機能、構造などについて書くことが望ましいとされている。ただし試験では、作品や著者に関するこうした情報は与えられないため、評釈問題であっても、文学史に関する最低限の知識は必要である。

次に、問題提起を行う（例：我々はマケドニアの若き英雄の神話を作者がどのように新しく書き換えたかを検討する）。テクストの特徴から、作品の要点や独自性を把握した上で、自分が決めた解答の主題を発表する場である。つまりここは、テクストの主意をどのように読み取ったかが表れる部分であり、着眼点や読解力が評価されていると言える。

問題提起の次は、解答の構造を序論として示す必要がある。3.1節でも述べたように、これから自分が、どのようなことを、どのような筋道で論じるかを伝える場であり、答えを要約・構成する力が求められている。

なお、模範解答では「苦しむ人間として」「すべてを剥奪された王」「欲望する人間」という、３つの章に分けて述べることが示されている。

序論を書き終えると、本論にとりかかる。提起した問題に対する答えの諸要素を、詳細に説明する場であるが、その説明には全て根拠がなければならない。たとえば、模範解答では以下のような解説がなされている（一部）。

・アレクサンドルは、まず苦しむ人間として現れる。テクストには「je（私は）」が15回も使われていて、アレクサンドルはその感情を観客に吐露する。テクストは悲愴なトーンで「泣く」という動詞が４回も出てくる。これらは、最期に臨む主人公の苦しみを表している。
・この剥奪の苦しみは、アレクサンドルが何者かであっただけになおさら堪え難い。彼は自分を剥奪された王と考える。アレクサンドルは王族で戦士の階級に属することで、伝統的な悲劇の主人公である。彼は征服者であるという意識をもっている。「剣、馬、闘い、征服、勝利」など軍隊に関する語彙がそれを語っている。彼が王族であることは、馬や戦争で獲得した「バビロンの宝」、勝利の記念品などによって判別されている。
・ここで、「ユーフラテスの青い虎」というタイトルについて、少々触れておこう。この表現は言葉遊びで、メソポタミアの大河と想像上の動物の両方にかかっている。« tigre » は「虎」だが Tigre はユーフラテスと合流するチグリス河の意だ。ここでは地名表現の大文字を使っていないので、「青い虎」には個別チグリス河だけではなくむしろ、他の河、「ガンジス河」とも関係のある想像上の動物を見るべきだろう。ただひとつ彼の「渇き」を癒すもの、聖書におけるサマリヤ人の水を遠く思い起こさせるようなものである。

（中島 2016：234-237）

これらにおいて解答の鍵となっているのは、テクストの細部にわたる

特徴を取り上げ、それらがどのような働きをなしているかを説明することで、論に説得力や客観性をもたせているところである。つまり、自説を論理的に強める手段として、こうした分析が行われているといえよう。このように、評釈とは、テクストにある具体的な材料、たとえば、語彙、レトリック、トーン、動詞の時制、代名詞の使い方、句読点、リズム、発話といったものの、意味や立場、技術、役割などを分析し、それらを説明することである。マークシート式の問題のように、文章内容を理解するだけに留まらず、一部始終にわたって、文章自体を批判的に見る思考力と、分析結果を論理的に伝達する力が問われているといえるだろう。

本論を終えると、最後は結論で締めくくる。3.1節でも述べたが、自分の設定した問題に対する答えを、できるだけ本論で使ったものとは別の言葉で表すことが理想とされている。なお、このテーマの模範解答では、「このテクストは人間の条件についての美しい瞑想である。悲劇の主人公を通じて、観客は完璧なカタルシスを味わう。ゴデは巧妙に、勝ち誇った征服者を裸にしてゆき、代わりに運命に打ち負かされた男を出現させる。観客は彼の『渇き』に共感し、彼の時間を超えようとする欲望、この『魂がまだ長い間、馬の息吹に揺すぶられる』希望を共有することができる。ゴデは、聖書の文言を交えることでテクストのなかに聖なるものを導入し、アレクサンドルの運命はまた我々のものだと思わせ、こうして悲劇という伝統的形式を再生するという挑戦に成功したのである」と結論付けられている。

以上が、解答の一例である。最後に、求められる学力の参照として、フランスの教育情報サイト、éduSCOL に記されている、合目的性（Finalités）の項目を見ることにする。そこでは、フランス語の試験で評価される能力や知識として、以下のものが挙げられている。

・文体や表現の技法（maîtrise de la langue et de l’expression）
・テクストを読み、分析し、解釈する力（aptitude à lire, à analyser et à interpréter des textes）

・異なるテクストの関係を結び、問題提起を導く力（aptitude à tisser des liens entre différents textes pour dégager une problématique）
・フランス語の授業で学習したことや、読書、個人的な経験により培われた、文学の素養を結集する（aptitude à mobiliser une culture littéraire fondée sur les travaux conduits en cours de français, sur des lectures et une expérience personnelles）
・論証された見解を構築し、自分のものとは別の観点を考慮に入れる力（aptitude à construire un jugement argumenté et à prendre en compte d'autres points de vue que le sien）
・論理的な創造力の実践（exercice raisonné de la faculté d'invention）

ここからも、フランス語の試験では文学知識、読解力、分析力、表現力など、様々な力が問われているとわかる。なお、本論で取り上げた解答方法には表れていないが、「論証された見解を構築し、自分のものとは別の観点を考慮に入れる力」は、作品のテクストなどを引用して自分の論に説得力をもたせることを指し、「論理的な創造力の実践」は、「創作」問題で、抜粋されたテクストの続きを、文体や展開などを意識しながら執筆することを示している。いずれにしても、バカロレアの論述試験で求められている学力とは、論理的な文章を作る上で必要とされる技術であるといえるだろう。

### 3.3　哲学の試験

哲学では、3つのテーマから1つを選んで解答する。そのうち2つは、疑問形の問いに論じて答えるもので、残りの1つは、哲学著作から抜粋されたテクストを評釈するというものである。たとえば、2015年に文学系で出題されたテーマは以下の通りであった。

Sujet　1－ Respecter tout être vivant, est-ce un devoir moral ?
（あらゆる生物を尊重することは、道徳的な義務であるか）

Sujet 2－Suis-je ce que mon passé a fait de moi ?
（自己は自身の過去の所産であるのか）
Sujet 3－トクヴィル（Tocqueville）『アメリカのデモクラシー（*De la démocratie en Amérique*）』のテクスト解釈

このように、哲学では物事の根本原理を問うテーマが出題される。ではこのような、抽象的な概念を扱う問題を解くには、どのような力が必要とされるのか。

まず留意しておかなければならないのは、哲学は個人の素質を問うものではなく、リセで学習したことを評価しているというところである。1.2節で述べたように、哲学はどのコースでも必修科目であるため、バカロレアを受験する者は皆、リセで哲学の授業を受けることになる。その教育においては、表３・表４のように、扱うべき哲学の概念や著者が、カリキュラムとして国民教育省によって定められている。生徒はそれに沿って、哲学的主題の扱い方や、それに関する哲学者の主張を学び、小論文の作成を練習するのである。つまり哲学は、あくまでもこのバカロレアに向けた準備の結果を測っているのであり、「個人の哲学的才能や文才」（坂本、2012）を試しているのではない。これは他の科目についても同様である。

**表３　哲学教育が扱う概念（文学系コース）**

| 領域 | 概念 |
|---|---|
| 主体 | 意識、知覚、無意識、他者、欲望、存在と時間 |
| 文化 | 言語、芸術、労働と技術、宗教、歴史 |
| 理性と現実 | 理論と経験、証明、解釈、生物、物質と精神、真理 |
| 政治 | 社会、正義と権利、国家 |
| 道徳 | 自由、義務、幸福 |

出典：http://ci.nii.ac.jp/els/contents110009535724.pdf?id=ART0009984101

**表 4　哲学教育で扱われる著者**

| 時代 | 著者 |
|---|---|
| 古代・中世 | プラトン、アリストテレス、エピクロス、ルクレティウス、セネカ、キケロ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス、セクストス・エンペイリコス、プロティノス、アウグスティヌス、アヴェロエス、アンセルムス、トマス・アクィナス、オッカムのウィリアム |
| 近代 | マキャベリ、モンテーニュ、ベーコン、ホッブズ、デカルト、パスカル、スピノザ、ロック、マルブランシュ、ライプニッツ、ヴィーコ、バークリ、コンディヤック、モンテスキュー、ヒューム、ルソー、ディドロ、カント |
| 現代 | ヘーゲル、ショーペンハウアー、トクヴィル、コント、クルノー、ミル、キルケゴール、マルクス、ニーチェ、フロイト、デュルケーム、フッサール、ベルクソン、アラン、ラッセル、バシュラール、ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、ポパー、サルトル、アレント、メルロ・ポンティ、レヴィナス、フーコー |

出典：http://ci.nii.ac.jp/els/contents110009535724.pdf?id=ART0009984101

哲学は生来のセンスを問う試験ではないと述べたところで、これまでのように、解答方法や模範解答などから、求められる学力を明らかにする。

まず解き方についてであるが、解答の基本的な構造は、これまでに述べた歴史やフランス語の場合と、大部分において共通している。すなわち哲学においても、テーマの分析、問題提起、プランの説明、本論、結論といった流れが、論述の一般定型とされている。

このうち最初に行うテーマの分析とは、主に問題文を精読し、用語を定義することである。たとえば先に挙げたテーマ２の場合、フランスの入試用学習サイト、annabac では、テーマを «Suis je… ? »、« ce que mon passé a fait »、« de Moi » の３つに分け、それぞれを「自己同一性（自分を知り、自分でいること）」、「人間の時間的側面と歴史」、「今の自分、自覚している自分」と解釈している。このように、与えられたテーマのキーワードを、どのように捉えるかという概念化の作業が始めに必要とされる。なぜなら、この作業によって、「重要な論点、主要な学説、引用すべき著作」（坂本、2012）が絞られ、解答の方向性が定められるからであり、また、テーマの意図を正確に読み取ったかが表れるからである。

いわば、テーマの分析とは与えられたテーマに隠された課題や問題を探し出す行為であるといえる。

テーマの分析の次は、問題提起である。哲学の場合、テクスト解釈以外のテーマに関しては、あらかじめ問いが設定されている。しかし哲学では、それを解くにあたって処理しなければならない問題点を表さなければならず、「与えられた主題に、論理の一貫した答えが複数あって、それが互いに矛盾するという構図を作ること」（中島、2016）が求められている。つまり哲学の論述とは、与えられたテーマに対して１つの答えを単純に述べていくのではなく、ありうる答えを少なくとも２つ以上挙げ、その中でどの論理が最も合理的かを検証するというものであり、こうした論の基盤になるのが問題提起である。この問題提起の例として、同サイトのテーマ２の模範解答では、以下のように述べられている。

> 自分が、自分という結果のもととなった出来事や知識を自身の中に持っていることは明らかである。つまりそれは、自分を決定づける過去が、自分の人生全てを左右し、自分が自由になることを妨げるほどの、大きなおもりを持っているということなのだろうか。だが反対に、自分の過去が自分を作り上げたのではないとすれば、自分の責任についてどのように説明すればよいのか。つまり、昨日の自分と今日の自分が、唯一無二の同一人物を形成しているということを、どのようにして説明すればよいのだろうか。［引用者訳］

つまりここでは、「自己が自身の過去の所産であるのなら、自分の自由が束縛されることになるのではないか」という説と、「自己が自身の過去の所産でないのなら、過去の自分と現在の自分の関係を説明できなくなるのではないか」という説を並べていることがわかる。このようにテーズとアンチテーズを対立させ、そこから論を発展させていくのが哲学における「思考」とされている。なお、挙げた説のうち、どちらの立場をとろうとも、それが客観的に論証されているならば高評価の対象になる。

また、「問いそれ自体を批判し、単なる肯定、否定の二項対立に陥らない結論を出すことも、それが論理的帰結であれば認められる」(坂本、2012)。

問題提起を終えると、解答のプランを示し、その内容を本論で進めていく。ここで必要とされるのは、自分の説を裏付けるために、哲学者などの考えや文章を引用することである。たとえば、テーマ２の模範解答では以下のように述べられている。

> ベルクソンからすると、時間を視覚化する科学的予見が、意識の真の性質を表しているのである。つまり、持続である。『精神のエネルギー』によると、「意識とは過去と未来の間に架けられた橋のよう」だという。ゆえに、自分は過去を背負ってはいるが、それは未来に働きかけ、選択をし、自由を行使するためである。[引用者訳]

このように、引用は論を客観的に補強するために用いられなければならないのであり、与えられたテーマとは無関係な引用や、説明の伴っていない引用など、不適切なものはかえって低評価の対象となりうる。また、この引用に関して必要なのは、あらかじめ哲学の著作に触れ、重要とされる主張、および、それが述べられている著書とその著者を覚えておくことである。裏を返せば、著作の一節などを記憶していなければ、引用を用いることはそもそも不可能である。哲学の試験は才能ではなく、学習したことを問うものであるとする所以の１つが、ここにあるといえるであろう。

本論を書き終えると、最後に結論を述べる。結論は、本論で挙げた２つ以上の説のうち、どれに軍配を上げるかを決定する場である。また、テーマに対する答えの根拠も示さなければならず、単に肯定か否定かで答えるだけでは、結論としては不十分である。このようにして、テーズとアンチテーズからサンテーズ（総括）を導くのが、バカロレアの哲学試験の解き方である。なお模範解答では、テーマ２は、「自分は時間的存在である。それゆえ、個人的・集団的観点から言えば、自分は自身の過

去が作ったものである。しかしそのような主張は、自由な行動を妨げるこの過去が、排他的な決定を下すという問題を引き起こしてしまう。もし過去がおもりでありうるなら、それから解放された時から、踏み台となることもできる。そして自分は、自分自身が過去から作った存在となるのである［引用者訳］」と結論付けられている[32]。

以上が、哲学の問題の、一般的な解き方である。最後に、ある学習参考書[33] に記載されている、バカロレアの哲学試験の採点基準を一例として以下に挙げ、どのような点が評価の対象となっているかを確認しておく。

0－5点：問題文あるいはテクストがまったく理解されていない。内容のない答案。受験者は小論文あるいは哲学のテクスト説明が何かを知らない。

6－10点：問題文あるいはテクストが理解されていない（6－7点）。しかし書き、考えをまとめる努力がみられる（8－9点）。大部分の答案はこの範囲に属する。

11-15点：主題あるいはテクストが良く理解されている。受験者は小論文あるいはテクスト説明ができる。分析でき、議論でき、自分の知っていることを繰り返すだけでは満足していない。

16-20点：あらゆるすぐれた美点を持った答案（問いの理解、諸観念の構成、引用の豊富さ、など）。

この採点基準から、テーマに対する理解度や、論文としての体裁、引

32）別のサイト、philomag.com では、「ゆえに自分は自身の過去が作り上げたものではない。確かに記憶は、自己同一性に必要不可欠である。しかしそれを、前に進み、なりたい自分になることを妨げるブレーキやおもりのようなものと考えてはならない。過去に留まることなく、未来に自分を突き動かすために、我々が記憶を利用するのである。したがって、いうなれば我々は、我々が過去から作り上げた存在なのである［引用者訳］」と結論付けられている。

33）Godin, Ch.（2011）. *Le Bac Philosophie pour les Nuls*, Paris, Éditions First.

用の適切さなどが見られているということがわかるだろう。哲学の試験では、歴史やフランス語と同様に、テーマを読み取る分析力、文章を構成する力や、それを説明する上での表現力が求められるほか、複数の説を比較し、合理性を判断する力、客観的事実から答えを推理する力、論理の矛盾点や問いそのものを批判する力など、様々な論理的思考力が求められているのである。また、哲学者などの主張を、一字一句間違えることなく引用すること、つまり、正確な知識も哲学においては不可欠である。つまるところ、哲学で問われているのは、単なる個人の考えのみではなく、主観的ではない根拠に基づく、一貫した論理であるといえるだろう。

## 結　論

本論では、試験問題の解き方や模範解答、評価基準などから、バカロレアで求められる学力について考察した。

その学力としてまず挙げられるのが、文章を作る上で必要とされるものである。すなわち、解答内容を要約する力、それを一貫した論理となるように構成する力、論旨や論展開を明確に伝達する表現力である。こうした能力は、マークシートのような選択型の問題では、解答が記号のみで表されるために測りがたい。また、単に文を連ねるだけに留まる記述式の問題においても、論文としての体裁を求められているわけではないため、絶対的に必要とされているものではない。いわば、答えを「選ぶ」のではなく、「作る」試験であるこそ、バカロレアでこうした力が問われているのである。また、この「作る」とは、独創的な考えや新しい発見を生み出すことではなく、問いに対する客観的な答えを、１つの論として展開していくことを指す。それはあくまで、リセの教育によって培われた論の書き方であり、第２章で定義した通り、才能といった先天的な力ではなく、学習した結果としての学力なのである。本論では問題例として歴史、フランス語、哲学のテーマを取り上げたが、バカロレアが論文を作る試験である以上、このような「書く」力は、どの科目にお

いても高評価を得る上で不可欠である。

次に、主題に対する思考力が挙げられる。つまり、具体的な問いが、歴史の問題のように与えられていないにせよ、哲学の問題のように与えられているにせよ、また、評釈問題にせよ、出題されたテーマの意図を正確に読み取り、限られた情報をもとに自ら問題を提起する、読解力や課題発見力、分析力である。また、哲学においては、論を展開する上で比較、推理、批判といった、とりわけ論理的に物事を考える力が要求されているといえるだろう。

そして当然ながら、こうした論述試験においても必要とされるのが、知識である。知識は解答を作る上での基本単位となるほか、歴史的人物の引用に関しては、論を客観的に補強する役割を担っている。その知識において重要なのは、言うまでもなく豊富さや正確さである。ただしここでの正確さとは、単に必要事項を覚えているかどうかといったことや、内容の理解、誤字・脱字のみを表すのではなく、主題に対する適合性、論証を支える根拠としての妥当性や合理性までを意味する。つまり、知識を単純に並べるのではなく、それが与えられたテーマに即しているかを判断し、かつ論における適切な場面で、適切に用いなければらない。いわば、学習したものを問題に合わせて応用する力が求められているのである。

以上のように、バカロレアでは多様な学力が問われているということがわかった。それは、バカロレアが論文を作る試験であるからこそ求められる能力であるといえるだろう。

（本学卒業生）

**参考資料一覧**

〈参考文献〉

・ 原田種雄・手塚武彦・吉田正晴・桑原敏明編（1988）『現代フランスの教育 ── 現状と改革動向 ──』、早稲田大学出版部

・ アントワーヌ・レオン著、池端次郎訳（1969)『フランス教育史』、白水社
・ 細尾萌子（2017)『フランスでは学力をどう評価してきたか教養とコンピテンシーのあいだ』、ミネルヴァ書房
・ 中島さおり（2016)『哲学する子どもたち　バカロレアの国フランスの教育事情』、株式会社河出書房新社
・ 荒井克弘・橋本昭彦編著（2005)『高校と大学の接続：入試選抜から教育接続へ』、玉川大学出版部
・ 戸瀬信之・西村和雄編（2011)『教育における評価とモラル』、東信堂
・ 田中耕治編（2010)『よくわかる教育評価』第2版、ミネルヴァ書房
・ 新村出編（2008)『広辞苑』第六版、岩波書店
・ 小学館『大辞泉』編集部（1995)『大辞泉』松村明監修、小学館
・ 恒川邦夫・牛場暁夫・吉田城編（2010)『プチ・ロワイヤル和仏辞典』第3版、旺文社
・ Josette Rey-Debove et Alain Rey（sous la derection de), *Le nouveau petit Robert : dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, Paris, Dictionnaires Le Robert, 2000
・ *Larousse junior*, Paris, Larousse, 2003

〈参考URL〉
・ 大場淳（2005)「フランスのバカロレアと高等教育の質保証に関する一考察」広島大学高等教育研究開発センター、http://home.hiroshima-u.ac.jp/oba/docs/baccaluareat20050521.pdf（2017年1月8日参照）
・ 大場淳（2005)「フランスにおける大学教育改革　── 第一期における教養教育の導入を中心に ──」、広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）第53号、pp.341-350、http://home.hiroshima-u.ac.jp/oba/docs/kiyo53.pdf（2017年8月6日参照）
・ 細尾萌子（2010)「フランスのバカロレア試験における評価観：問題作成と採点に関する議論の歴史的検討を通じて」京都大学大学院教育学研究科紀要56号、pp.387-399、http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/108466/1/eda056_387.pdf（2017年1月8日参照）
・ 文部科学省「各国の大学入学者選抜に係る共通試験について」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2014/06/09/1348274_8.pdf（2017年1月8日参照）
・ « Baccalauréatgénéralsérielittéraire（L）» éduSCOL, http://eduscol.education.fr/cid58534/serie-l.html（2017年1月8日参照）

・« Baccalauréatgénéralsérieéconomique et sociale（ES）» éduSCOL, http://eduscol.education.fr/cid58532/serie-es.html（2017年1月8日参照）
・« Baccalauréatgénéralsériescientifique（S）» éduSCOL, http://eduscol.education.fr/cid58536/serie-s.html（2017年1月8日参照）
・独立行政法人　労働政策研究・研修機構「学校制度と職業教育フランスの学校制度と職業教育」、http://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2004_6/france_01.html（2017年1月8日参照）
・« 20. BACの季節 » フランスニュースダイジェスト、http://www.newsdigest.fr/newsfr/actualites/jidai/7218-20.html（2017年8月6日参照）
・森田康夫「フランスの歴史・地理　教科書と国土教育 ── 『考え、表現すること』『空間で捉えること』を教えるフランスの教育 ──」、http://www.jice.or.jp/cms/kokudo/pdf/tech/reports/27/jice_rpt27_10.pdf（2017年7月31日参照）
・「諸外国の教育評価　フランス　小学校から厳然とある『落第』 ── 個人が評価される確実な知識と論理 ──」、https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/csken/pdf/52_06.pdf（2017年7月28日参照）
・文部科学省「第Ⅳ章　フランス」、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/09/21/1323725_2_1.pdf（2017年8月6日参照）
・荒井克弘「諸外国の大学入試制度」大学入試センター、www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai10/siryou1_1.pdf（2017年8月6日）
・« Le baccalauréat : repèreshistoriques » Ministère de l'Éducationnationale, media.education.gouv.fr/file/47/8/5478.pdf（2017年8月6日参照）
・« フランス…哲学も問うバカロレア » IKAニュース速報、http://www.ika-online.info/a-22899.html（2017年8月8日参照）
・« Correction Histoire Géographie- Bac ES 2017 » digiSchool https://www.bac-es.net/document/histoire-geo/correction-histoire-geographie-bac-es-2017-4839.html（2017年8月16日参照）
・« GRILLE D'ÉVALUATION LA COMPOSITION HISTORIQUE », Les Clionautes https://www.clionautes.org/archives-clio/profs/sentier/evalycee.pdf（2017年8月17日参照）
・大前敦己（1997)「バカロレア試験とその勉強法」、上越教育大学研究紀要第17巻第1号 https://juen.repo.nii.ac.jp/?action = repository_action_common...id...（2017年8月19日参照）
・« Sujets du bac de français 2015 Corrigé du commentaire（series S et ES）», éduSCOL https://www.etudes-litteraires.com/bac-francais/2015/commentaire-s-es.php（2017年7月4日参照）

・« Définitions des épreuves de français », éduSCOL
http://eduscol.education.fr/cid48105/definitions-des-epreuves-de-francais % C2% A0.html（2017年8月23日参照）
・坂本尚志（2012)「バカロレア哲学試験は何を評価しているか？ ── 受験対策参考書からの考察 ── 」京都大学高等教育研究第18号、pp.53-63、
http://ci.nii.ac.jp/els/contents110009535724.pdf ？ id = ART0009984101（2017年8月26日参照）
・« Suis-je ce que mon passé a fait de moi ？ », annabac
https://www.annabac.com/annales-bac/suis-je-ce-que-mon-passe-fait-de-moi（2017年8月31日参照）
・« Suis-je ce que mon passé a fait de moi ？ », philomag.com
http://www.philomag.com/bac-philo/copies-de-reves/suis-je-ce-que-mon-passe-a-fait-de-moi-11686（2017年8月31日参照）